

北九州空襲の記録

惨状と復興への道



八幡大空襲後の八幡市西本町（提供：北九州市）



©北九州市

太平洋戦争後期の1944年（昭和19年）6月16日未明、北九州の地は突然、爆弾の嵐に襲われた。米軍による空爆で、ボーイングB29によるものとしては初めての日本本土空襲。北九州はこれ以降、翌1945年8月8日まで繰り返し空襲に見舞われ、多大な死傷者、自然と施設破壊に遭い壊滅的な打撃を負った。その中で奇跡的に生き、今日の社会を築く源になったのもまた、その被害者市民だった。

本土空襲先端被害の地
北九州 被害惨状多大

6月16日のB29は中国・成都の米軍基地から八幡製鐵所を主目標に出撃したもので、47機が約2時間にわたって北九州を波状攻撃した。目指すコークス炉破壊には失敗したものの周辺市街地に大きな被害を生んだ。「北九州市史」（昭和62年刊）によると、旧門司、小倉、若松、八幡、戸畑の5市で死者322人、重軽傷者477人、全半壊646戸など。実際はさ

らに上回っているとみられる。うち旧小倉市域の死者94人。小倉造兵廠では80数人が死亡したが、その大半は風船爆弾製造に従事していた女子挺身隊員だった。

これ以降、連日のように空襲警報が鳴り、8月20日には初めて昼間、やはり八幡製鐵所を主目標にしたB29が61機、翌21日未明にも20機が来襲。製鐵所のコークス炉などを破壊したばかりか八幡で約200人の死傷者をはじめ周辺市街地にも大きな犠牲を強いた。この空襲では小月飛行場から迎撃に発った日本陸軍の飛行戦隊機が高度7000mで敵のB29に体当たり、その破片で他の1機も墜落させる空中戦が展開された。

1945年に入ると、太平洋・マリアナ基地発進のB29による空襲が日本全土の大都市で展開。北九州では関門海峡封鎖を主目的にした門司、小倉への空襲、機雷投下が繰り返された。

そして8月8日午前10時、B29約120機が来襲、八幡、若松、戸畑が約1時3人、全焼家屋1万7327戸、半焼家屋1323戸、全壊家屋493戸、半壊家屋1589戸、被災者8万1732人とする。

戦争のない社会
未来へ向かって

八幡大空襲を体験した松原孝さん（88）は「尾倉小6年の時。新聞配達を終えてすぐの空襲警報で近くの青果市場の防空壕に母と妹2人を連れて入った直後、焼夷弾が落ちてきた。壕に煙が入り死ぬかと思った。尾倉小校庭では小伊藤山被災者を焼いた黒い油の痕が数年後まで残っていたことを思い出す。4年生の時の学年集合写真があるが150人のうち、3、40年後に会った先生の他には1人も会ったことがない。戦争の悲惨さ、むごさ

防空壕跡地の小伊藤山公園に立つ
戦災死者の慰霊塔

間にわたって焼夷弾攻撃にさらされた。うち八幡製鐵所関係は工場、宿舍などを焼失、死者87人を出した。八幡市全体では約2500人が死傷、1万4000戸が焼け、5万2562人が焼け出された。特に悲惨だったのは小伊藤山防空壕に逃げ込んだ約300人が爆炎の熱、煙に閉じ込められて窒息死したこと。若松市でも死者81人、重傷43人、全半焼950戸、戸畑市では死者33人、負傷30人、全半焼342戸という惨状を呈した。

この小伊藤山防空壕惨劇については近年、新しい情報が出ている。これまで、壕を感じる」と話す。証言集でも、多くの人が様々な悲惨な体験を告白し「孫子の代まで不戦の教育を貰っていきたい」「戦争は国民をだます」など貴重な言、主張を展開している。

北九州市遺族会連合会の三好正二会長（85）は、「八幡大空襲は若松の自宅から見た。若松の小学校には機銃痕が残っていた。遺族会は戦死者の遺族約1000人の会員だが、今、空襲被災者の遺族と合同で慰霊を、との声も出ている。戦争のむごさ、平和がいかに大切かを多くの人に知ってもらわないといけない。戦争はしらない、させない、互いに助け合いの心を」と訴えている。

シニアスタッフ 村田和夫
今回の歴史文化塾は感染予防のため中止致します。



現在の八幡市街地

内にいた約300人ほぼ全員が死亡したと言われてきたが、八幡大空襲を記録する目的で組織した市民グループ平野塾（出来谷通保代表）が呼びかけ編集した体験談集「あの日1945・8・8 八幡で何が起ったか」で、夫の助けで1人だけ脱出できた夫人、壕に逃げ込む際に入口が崩壊して入壕できず逆に助かった市民の証言、同じ小伊藤山防空壕内でも構造の

違いで100人強が生還できた場があったことなどが明らかになり、反響を呼んでいる。

この8月8日の八幡大空襲で生じた煙霧が翌9日、風向きによって小倉地方に流れ込んで街を覆い、そのためマリアナ諸島テニアン基地から小倉に原爆投下に来た米軍B29「ボックスカー1号」の爆撃手は投下目印にしていた小倉造兵廠を見つけれず、第2目標地・長崎に向かった。小倉が投下目標地にされたのは、製鐵所、造兵廠などの存在と人口密集地で爆風で効果的に破壊できることなどの条件に合致していたためといわれる。

この1944年6月16日から1945年8月8日までの北九州への主たる空襲13回を総合しての被害は、「日本都市戦災地図」は死者2452人、傷者158